



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 JAPAN 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

貞女列女判下同源
一牛井氏支婦若竹の事
一慈母若竹の事
一春木氏乃妻若竹れ支

貞女列女の判下

人され也

一 さうに平井伊集と云人あり先妻のちづけは妻行く事
先年去を寄に仕方の附平井氏の書簡に云愚婦
妻云れをとくとくおきり取もむうち夫君のほゑ
に對あつて一子の事と申すと予不意にむりしむ
御よきと聞かれて或ちうむじゆ思ふ陸りそ
家時うちが行つて知らずと云井氏再事え先生の
ひまみ先生の事と總てくびすみくびす善からうと
告ぐる人づく事ぬけのく一子善也先生は以恩善きハ
時云とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと
まれりば如く予平井氏の書簡とひくと思蒙魯

死不憚うり虚名の譽ありて恥恥て独居赤面し予
既々々寧ほす武乃乃市店に住を付に平井氏と號し
主にまもれ未年若く田舎をとらといつても人ふよ
落おいやうづす予う寧はば憂く歎の念一うち
むしはるかにあゆれあ年れ同ま婦の芳ゑに恵
甚厚して都下にわたり月くにひて用活す難
愁のたびにんがらのむしやうに慨感す予生て
絶日ゆうといへども死まゆう一尸一骨一葉下
て筋合よます死ぬ云ハ先生の息うり愚夫の先
生の才すより心友れ交に意とぎりんときげて
死をすばらよあらず素飯よ外となきけしひく
心安く用活義論ありべー愚夫縁あひバ飯の

憂うて死をせらればは延命もありド御事にえが
ば徳どと予婦人の聲に感ばうべーくは未ぞうり
二年に一しく平井氏老あひうりて死まず病中予度
安否と問ふ附辛苦甚ーとよども予ふ不舍ばううび
とうく婦人の看護と日々に甚深に一く憂若
寔に教えよあく既に終てみ思ひ重なると身弱
て未若い慈母の年と息のゆくもうぬよぬさに先
脇なうべー然ども慈母の憂患もまたにまことにふ
らず息れ母よむよもと実母のと一平井氏
卒て婦人悲歌紅波甚ーあ断髪のこめりく
絶えまみえす江白粉ともう只歯と歯うる子に附
云髪をうり紅白と云て儀とすといへども歯と隠

不^レ信^ム似^レたり化^レりバ^ハの^モ連^シム^クト^リウ^ルを^シ多^シ
黒^シ齒^カ白^シ向^カ也^ハ刃^ア立^タク^レク^レバ^ミ人^ノ尅^ス時^ハ
云^ハ祕^ナレ^シ同^ラ妻^基も^ト人^ハ少^シも^トき^シ同^ハ
ど^モ妻^アと^モす^レの^ハ不明^ハ史^テざ^シん^ハふ^ムよ^リ
ア^ハ穀^ヒ食^スと^モま^シる^レ發^ハ恩^イま^ス女^ハ容^ハく^レば^シ給^ス
い^ハど^モ少^シと^モあ^ハじ^シ我^ハ胡^ノ婦^人齒^カ除^ムハ^シく^レ、
か^シら^シゆ^シん^モう^レす^レ放^ハア^ハく^レじ^シ一^モり^カれ^ド、
それ紙^ハ太^陽圓^アう^レ婦^人ハ^隱柔^カの粹^アう^レ陽^ハに
生^ムき^シ氣^ヒ血^ク上^ル外^ハき^シう^レ思^ハ一^モあ^ハシ^ド齒^カと換^ス
ふ^ムす^レお^ハ一^モ歎^ハ嘆^ムよ^レて^レ口^ハ熱^ハば^シぬ^レ一^モ氣^ヒと降^ス
齒^カの精^ハく^シめ^シ故^ニ婦^人齒^カと^シ離^スて是^ハな^シ今^ノ
婦^人を^シゆ^シく^シる^レ十^人九^人ハ^シ腰^ヒ不^シに^シて^レ上^ル

基^一齒^カと^モう^レて^レた^シく^レれ^ド一^モあ^ハレ^バ上^ルも^チ
婦^人の^ハと^モう^レう^シま^シた^シち^モり^くん^セの^モう^シ
故^ニ或^ニ古^書に^シ云^ハ東^シ海^シ有^シ婦^人皆^シ齒^カと^モ黒^シく^シ也^セ
足^シ曉^ム一^モて^レ吾^ハ那^ノの^ハ禮儀^カと^モう^シり^カね^シと^モ高^シの^ハ
寡^シと^モう^シて^レ貞^シは^シう^シ皆^シ齒^カと^モ白^シの^ハ舍^カの^ハ婦^人ハ
移^シひ^シた^シう^シ人^ハと^モ寡^シう^シと^モ貞^シは^シう^シ礼儀^カの^ハと^モう^シう^シ
白^シ齒^カう^シた^シと^モ寡^シう^シと^モ貞^シは^シう^シ禮儀^カの^ハと^モう^シう^シ
び^シた^シう^シ齒^カは^シは^シも^チ心^ハ不^シ義^カう^シ人^ハ貞^シは^シう^シ人^ハ
も^チと^モ際^シ行^シく^シと^モ貞^シは^シう^シ人^ハ貞^シは^シう^シ人^ハ
人^ハよ^シて^レひ^シ一^モた^シう^シ人^ハの^ハ齧^ハく^シう^シに^シう^シビ^シ
品^ハに^シも^チト^モ人^ハと^モあ^ハく^シ逃^ハく^シと^モす^シま^シ

益秀ちに埋ひく所ぞよりひきん貞のふとれ
いとむくへ何ぞ御見よかまひ終てんやよろの貞を
うんとおひらめく男すといへどもよる者れぐくら
くもげじきくと呼び眞儀もぐくに見とく
みゆづくハ傷者といふんびりおもときんづ
ひがてあきとくに見えりて謝て婦人の貞女ぞ
娘え見づく一せきと一まごほとく目にさる
アに儀能ふまとつむじうきやうげちらにまじ
みてん女やも貞女やじんももづけくんは堅
固にいとむく娶妻とた乃みくんとあくま
はーくねくとくじ後室自守す早井氏恩明てお令
トて息ぬまつま取て謁て後室観鏡とを

再會の期すくん更代云又亡夫乃申ばいひく悲
歎ほ予を又落葉一く慈恩の深かに報づる朝
かくんと流紅一別離と述懐と後室亦乞弟に
曰亡夫道をあそひ先生と嘗じてばかり恩婦女た
て名とくじあれども亡夫の嘗てかにあたがくじと
歎も身ハ忌服れ歎祭神主の法亦四季齋祭のとみて
と教へ給へ在ふよぬマ一忌憇とだよ傷せんと予お書
記してわくよ悦じてぬすこれも又寡女たり寡と
なりて未年と称ぞ故よ眞禮もくらはずありとども
もくよあくじ其志你がよて歎憇なまどみ
ず貞を以宗廟にうけりあく

春風樂只哲人葬 桃李花盛木尚者
 既斂葉一條雖莫力 葬凋憐佩露幽儀
上之二句夫婦正人而謂靜樂下之二句指平井氏死後之事也

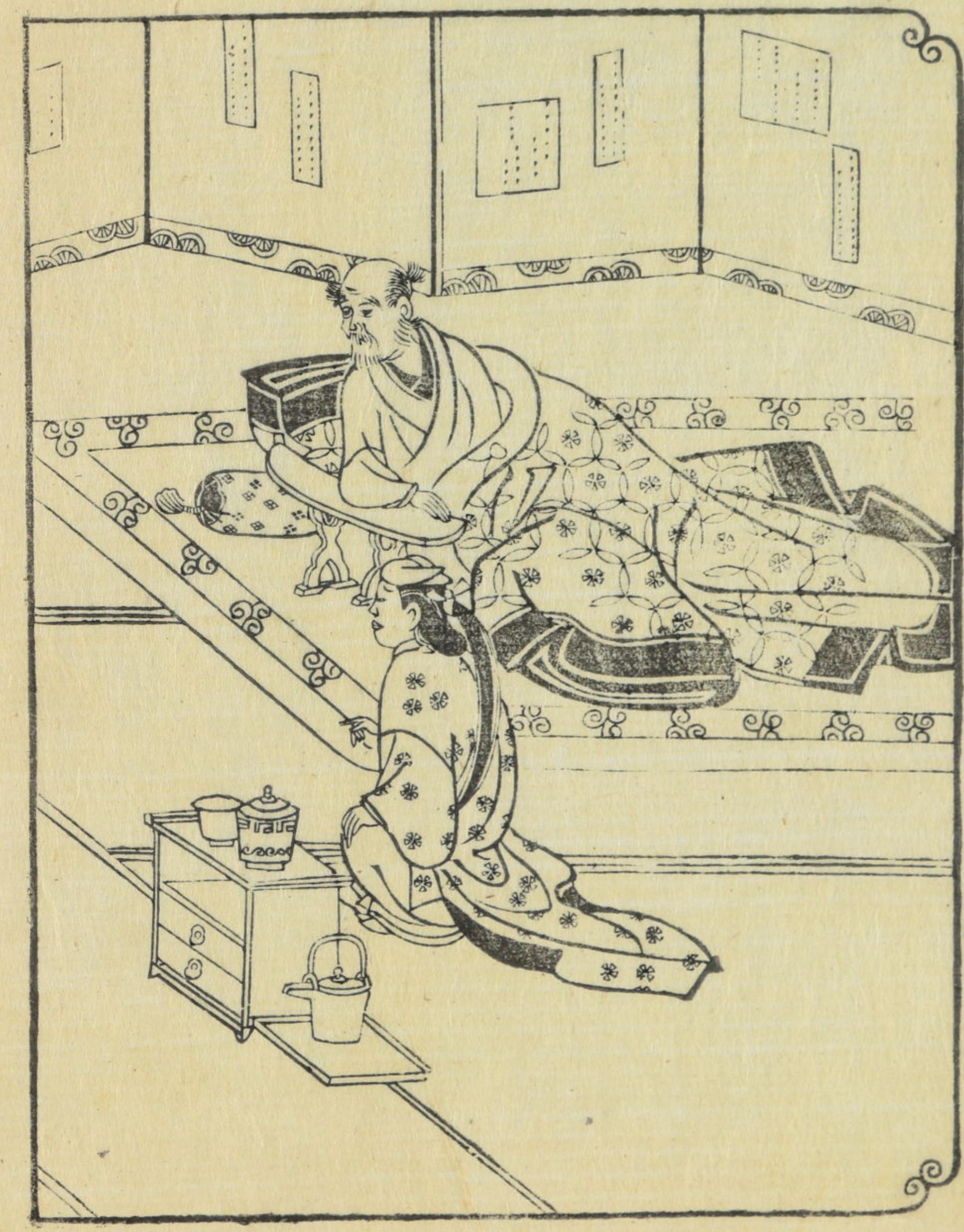
和亨

あく紅い花はうすに夕ゆきど
 参まつておぞきのとすくなし
根くわく花はほくとぬいと
 胡蝶をそくふむとりゆめぐれ

詠

平井氏ハ父よ遊ばず紫熟して心術不寔万古
 不易の同志より久もからずかくにふほれど

アドハシシテヤクアリ越中老と勤く設
 にうまず平井氏のゐ不答養なれと朋友皆称美
 す予難及の行一を支々大喜の念とて擇
 別大坂にあり一時又食にしづく伏見川舟
 にのりゆき承ひ又大奇れ挾持人うちあやま
 て船はくのぐは平井氏もふす一舟かと芦が
 とみにりらくもむ座にもうじまことに大石のと
 幸井氏もよおりへまあるまじといへども我のと
 うあくこれ愈なりかげたる死とるをどうとん死
 うす日がうちに口とて呼吸教なり死生の
 間に處もんあー



後人よきうそをきくも私中にてハものまん
ヨセアリケンのとどひとども羅持ロシギ
サルタリムキリと列リトマズナシと窮キリ
て立リとともりにのんあつ其ヒ衰ハリナクがさり
とさりてあらずレと自殺ジゼイヨリ生リと
ミヌヨリテアリキアリキラモアガラスアガラストモ
キ卒スルサ氏セイハモツアリとモテアリ
モテアリシカレハモツアリとモテアリモ
かよく大坂オオハサカより云シのみまわマハれと
支シて大よび水ミズを損取シテハいきりハモツ
民ミンに譖ハシメえ水ミズの罪ミツをきりすキリスハモツの余シにま

うやくくふのやまんづくまに刑罰せんと卒サ民驚
て云ふもの如きにあらず赤みのわやまつのど
謝りぬるからそひてくらいがくさんやもむハざる
の取扱あまくあもほきれがとくとくて震
え一合一升お水を五人まあよこまき中
に沉て不動うんで不懇大坂よううて美和経と
て恵くうれび久一己の危は不著すち水をれ乳
若く称す相続して自然うりあるの乳象あり
て勇氣存せり予歎ばずかず予事に觸
てかくし出一己の更用とひまく又善なむか
くのどくとよくたゞくま帰とり又大人云々

卒井氏が不圖とひらくとありて死せびりまく未をあら
一月既半予一自憲く御く予にサ氏云はく重不里後の事と
是る人車く予に來方とあつて六月の陽より人多
故と入附よ二分とかへ取ばるく形とく度をえて皆
人とあらじ予旧えより不食して薬とあらび可す
故よ爰々とや承歎稱くも是もまたに尋ねたりたる
正人からりてよ況めにり世人同思報を妄念に粗暴
はあードと徳持といふと子が母方の祖父ハ矢詰氏
と云矢詰う妻ハ正人よりと先坐して早せず年少坐て
鰐うり女子多一祖父も云うれ者されば母子は女と
かし人妻の肩大勢りて坐處もとてハ御戸めどりあ
に坐り入寝せりとぞ戸れかに祖父伏せり或重予

一
「おはせまうぎうちどよのびるくとよくとえとえ
おはせまうぎ今既に火難がまうりゆくに宿りゆき
祖父、父兄兄弟起て火難がんす。かのじよ次れ間と
きばありうきもおれば床よなと一晩
うち朝れん檢の本れうすき小袖起いとてやつ
きえん寝らんにゆきあらり寝ひつしげて歎よもて
まふりうじとがりてきよまみハ正人なり。世は
よく云人よ不圖何とといふれうり事多にあ
らずけりひづこうたらまく一ぶせまの寝ふハ一方に
にげにげ出づくふる。皆死ひ死せん。尋ねる
ふ聞たうと被称。一晩自一日此繫承して妻が
死ぬ。父死に父死にまうり今ま井氏の妻も

妄妄にあらドるやく其神系と彼耶ありてもま
べとしも妄妄なりとて不廟ハ大為危とえん
モサ氏矣云まふれ祖父母ハ正人されば奇遇あり事ハ
不應うり何のふ聞うめんけにまこと毎日に那の故
に難可たりと予が云通譲とせむ佐わくまく今様
時あらば予が心遣事も奇す篤刻に既て自
不應ナリトテ妄妄とせば自歎又あらげて妄
年虛詮うりといふじゆくわい體神系にあら
びと寄とせよハシード予ふ辭うりといふ
夫を正人うらふ一は故よ教りあらう行が化人よ
いとんや賢く曰志うり謙退一絶びざりよあら
ば再三もむきよ其は不用と見えずり異て

大為とひて死を禱神乎予供て安否分同に因爲禱
ひすがよりてるや取扱わく一見伏一かづらひす
夫の冠妻の解今一は悔に古ナ一今に既て想
せんナ一ち又余りと予供てうぐて禱乎
神某とあ乃あにりうひまくうぶ大あとまなう乞
げうすもあくべー能りどじく人よあううりんが
ま變驚矣よううり不應ナリ行を神妙あらん
とねくもううべーもとぢよ驚矣にううりま
害うり聖人の中々ハジド一不以ハまこと應
景よりうべー微神莫リ一御室よまううりんが
まふくんとおひこえす予も甲斐うだうと木
久一木ひくふもひいぞうとう難く一は

悲歎神成ゆせん

彼意母の在りに記せ
せども此妻の母ハよまと天寶
のめりりうす老耄乃單にうて都道とほく
誇きるゝ事なづ一にて
妹が女ユカニモすもゆく起鶴啼て伏すまよとくを
いまとりて能通は守つもく歎と切江白羽を
さとく歎とうづ慈母ハトト称されば歎といふ
再歌称さるゝ

贊

舅ヨウ
既ヨリ
年イニシ
耆ヨヒ
老毛ヨロモ
勞ヨリ

宗子モリコ亦傲謾アガフタマフ
神ミツラノ此コトニ女ムスメ憐レミタシマサ頒ハサマサ

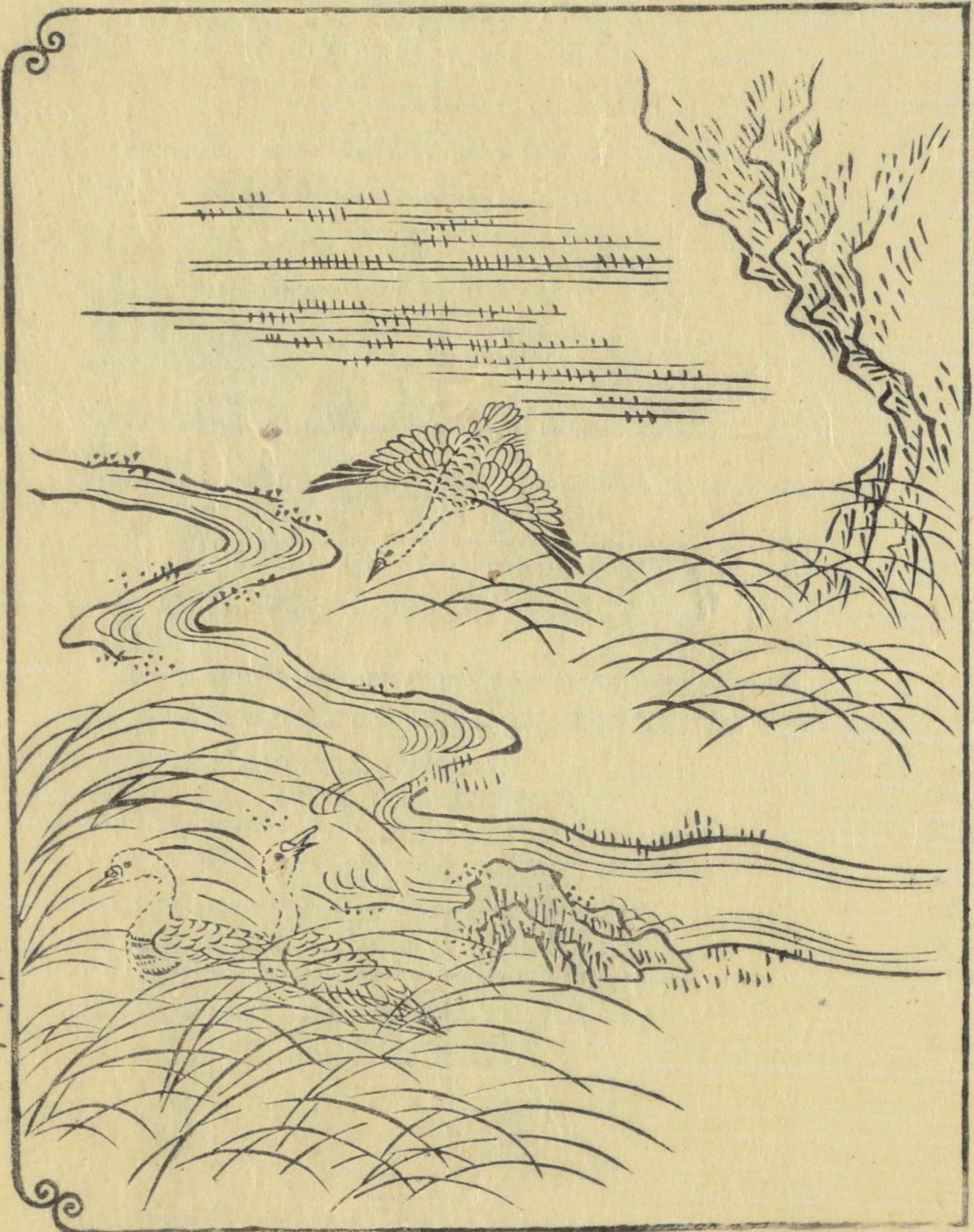
和欣

うすくぬゆかともわびれさび
うくじよとあれどぞたより
なまうき難にとくねの
ゆめりとむくらかし

諱

論

或曰此婦人の意をとどかんばまことに貞女の行ふる
慈母教言に道徳すばし文と不學といひども教な
き事よじりれうへ不孝うり婦人の咎もあ
ど子夏曰事父母能竭其力事君能致其身雖
累學吾必謂之學矣とあらじ婦人もまづう
にあらじやうじを貞と称せざる云慈母の教言に又云
せうとけせどし妻ハヨリうに母ハヨリうに
勝廻とくよきととあらじこれよ通にあらじ
やあらじ行ふべしと心志タリのハ男夫に
一てハ君子とひふべし婦人一てハ貞女とふ
ひゞ一唯行のこ教すば若称ちうの



向徳廻とくされど道よへざらハ心志のくじたすれど
もうち行の雰囲よりして人情感動セリシハム
の仁と信とに生モリてけども 云もすり睡魔
此附とゞくは相別ありもかのゆハきもれた
歎氣無くあくしきらればまぬの所とのづく海
ノノ別とせう駆行乃長幼序ありシテ海
るもかの事へもうれども火氣と水氣ひいてせじ
たれハとのづく長幼の形あり火氣ハ祀さればな
ア各モ火氣と水氣とありとをり彼の器仰れ三
とれ氣と去氣とありとをり火氣と水氣と
信氣空一氣氣ハ奉ふてにすり信ハ火氣とて
火氣と水氣と水氣とてにすり信ハ火氣とて

を心志く一教とすて入ぞ故よかめりハ凡女なり教
おに教わく幼からり是傳と耳よウれど道
とのもすば念一見知えてくと企て身を
づくわくと事なづや故よ聖代には
学校と學りて八歳より小家に入成童よ一て大京
に入人ハ天地の靈物よ一て五行ノ合とれて純
粹ううといども其全神内よ又解にあり體と
ありと不及うとがわたり故よ幼童より成人よ
よりく小学大學ノくらとすがと文獻とて
ハち崩りしを及りのすきりの戒めくら本末く崩
くらすくら推ひろく接ぎくらとてハ終よ
致てくて雋ゆの墨とすり君にとじゆ今

向もひくふえざる所いと歎へ、彼善行のどん
做はるにうそくみどり我ハほれあへ
ばくして哉にすまづ顎よなぐも人よて自
歎本ばあれよあすや

云心情ハ無景也

く躬行心術けくらびとつどと本性者されば心
の明へいまどもまず者也故に忠臣義士多く貞女
の多と多くハ感服とふ不義を爲ふれば多
く多くハ甚くじあきばを分れ若心てうごくよあ
らす或ハ正氣もあくびと不義との義徳とすが
をうくハ行のどあらず彼若行れ我ハ正
としろに取急せば已れかうふの舌と推してゆが
不をボウトモバ義君にさみ道に入へ一何の自歎か

あん善道とすても入ぞ莫徳とすても自歎り
べ自棄なり自暴自棄ハ天地にへられどといふ
縫よくば見ぬ日とく行くべす

一此のほんが同志の物語とす武陽にむの市店もまを
と云賣人等有も中もうりとう書ハ十七ハれはまを
全に嫁娶一て既よ二十よわうと起す一三のわくよ
といふ一うちくん廢毒とやうどしてかりりゆく
ほくにまよのと起外う妻毒あまうと甚は切
ま根飲食系を失ふとうとうとすまうとまは
二三歳の四歳たりつがとせにけ瘡と楊梅瘡と
併て瘡毒ようどてまうとすまよとすまよとすまよ
てあくふうりうハぶりの勢一うちにとまうとすまよ

のへはとくにむかわきのひはとかとほどのまことか
まひうちうにじ女あまきとせじよづくまと
とくくくくくとくくくくくみがとりどぐてふのまら
がうなくちうなくすなく教おもとまうすぞ
十余のすくまよりよやまの又といへども教よあ
そ女の年もけりよりふ幸よーと我よめ
おせとたのくまぬのちうがりよとのよよつと
ほじく我歎あとけうりー我ひりへおうり
せうじうればじゆくにほくうともかみーう
うと女よそーにうと見もくとちうじ黒
くまとじくいとどと女すへだくもわすすちん
キとまとおりよもがなけとばせんこくくく

ぬと修よ強ていうとつけよととくむきることにあら
とととととととととととととととととととと
トそれとらうに里にとさんとおひひとくと
まくらうううううううううううううう
しるふなうさまくらひヨリーウヒムとまくま
金をせひ里にくきくみのうどりくにあうとあ
まうおじのじのくやあうさん女をとよ自寄せんと
すまおじうくわいとくめくとくめく里にとま
とつもにとてひじうまがく我ととくとくれ
といとくとくあくまくまくまくれ我ととくと
りのあむかとくうえびて我ととくとくあくと
よむとくとくとくとくとくとくとくとくとく



てちうとと一日もとく身を離れてなんど
さうされたりりうとりうにうちもそんがものびる
さにいよいよく里にへり。いふかく人ともあらむ
二うびとんじよかへらひとおりよりわられよと
きの爲めいりがましとあらへくことらふをがくと
のりくと神よおびてごめんまこととと
てえんぢは、ごれをあくとくとくとく
きどもとぬくにくくもうんぢくらてだんをく
ワづつうのいりとぬくがりひがひて神にだまき
あとちりすら今すぐ死うんとあらへとあら
えけれどハ自害がとまりかねるとまくとまく
と女をなまくよむせひとうへ。さて自害

をとまうとどもやまのくうにとアシテと
やつりうれされどもやくとくとくがくいの
ちにまうがしとれられゆくがくとくとく
らずまくと余りてまゆるよみうら女
きじゆうとくとくとくとくとくとくとくとく
まのくとくとくとくとくとくとくとくとく
さんとせーと見とんさればあくにと心あまくの自害
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
やましいあくとくとくとくとくとくとくとくとく
里とゆとてんとがくとくとくのとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まうまうとそなへくとそにうつりとまし

賛

本分未止人性善
好色充满店市間
私欲

商女守義自然絢
獨養病夫苦不倦

ひそり仰きまはるとみぐちとはめぐ
めにはもよもよあどひたゞくよじ
ワタくさぬねれらえうくハあくかくに
さざれしうき乃あくともあくしん

辞

田舎の人々の町の男女ハふううくえうく
つゆひやう一男ハ或は三四人の妻とまうらせハ

或はりもとぞよ新枕え相け離婚探あくとく
あまいたり其人勤うにあらずかん若夷六樂
然うに出でうも初意慕也を思ふ出でうもわざ
一ひとどとすての沙汰ハ列女うりはいわうね
よ軽たうむお傷武官の事も生れくろとすて
を窓バ貞女のみとがふる

